

本 よみうり堂 「評判記」 上田紀行

“五感にまたがる味表現”

われわれの体験の中で、もつとも言葉で表現するのが難しいものは何かと言ったら、それは絶対「食」と「性」だろう。あの美味なる味、めくるめく体験をいかに言葉に置き換えるか。言葉の素人は、「おいしい!」「まずい!」「感じる!」「キモチイイ!」とか、常にボキャ貧気味だ。どんなにおいしいのか、どんなにキモチイイのかを記述するのはほんとに難しい。それには練達の言語技術が必要なのだ。

その技術とは何だろう。「美味しい表現の探求」なる副題に引かれて、『ことばは味を超える』(瀬戸賢一編・海鳴社)を読んでみた。まずびっくり。テーマが味であるからして、感覚的な本かと思いきや、味に関する膨大な例文の徹底的な分析だ。言語学者達が包丁よろしく、自分の理論の切れ味を楽しんでいる。例えば「深い味」という語法は実は視覚的な「深さ」を味に見立てたメタファー(比喩)で、「大人の味」は、「大人」という部分で味全体を代表させたメトニミー(換喩)だとか……。往年のベストセラー『レトリック感覚』(佐藤信夫・講談社)の「味」版というのか、ものすごくお勉強になる本である。

面白いのは、味の表現が「味覚」を超えているということだ。「丸い味」「ふくらみのある味」は視覚的表現、そういえば「味見」というのも視覚ですね。「ずしんとくる味」「ざらついた味」は触覚的、「うるさい味」「余韻が残る味」は聴覚的と、味は五感を超えてクロスオーバーする共感覚的事象なのだ。反対に「甘い判断」とか「苦みばしった顔」とか、味表現が味を超えてしまうこともある。味わいを「殺す」とか、素材を「生かす」とか、味は生き物にもなってしまう!

なるほど、味を味覚の言葉で語っていいはダメなのだ。五感を動員しつつ、レトリックで。ある時は擬人化し、擬音語、擬態語を駆使し……。ああ、やっぱり難しい。でも現代最高の味文学者「ショージ君」(東海林さだお)とあって、それをやりきってるんですね。やっぱりすごい。(文化人類学者)

2003年(平成15年) 4月20日(日曜日)